Regular Article

277

Electrodeposition Behavior of Zn-Ni Alloy from Alkaline Zincate Solutions Containing Various Brighteners and its Microstructure

Wataru Murakami¹⁾, *Satoshi* Oue²⁾, *Yu-ki* Taninouchi²⁾, *Shinya* Akamatsu³⁾ and *Hiroaki* Nakano^{2)*}

1) Graduate School of Engineering, Kyushu University, now Mitsui Mining & Smelting

2) Faculty of Engineering, Kyushu University

3) Yuken Industry Co., Ltd.

- Abstract: The effect of brighteners on the deposition behavior of Zn-Ni alloys ant its microstructure was investigated. Zn-Ni alloys were electrodeposited on Cu electrode at 10-5000 A·m⁻², 10⁵ C·m⁻², 308 K in unagitated zincate solutions containing various brighteners. Although the degree of suppression of hydrogen evolution was different depending on the kind of brightener, the transition current density at which the deposition behavior shifted from normal to anomalous was almost same in solutions containing brighteners. The current efficiency for alloy deposition significantly decreased with an addition of brighteners which had suppression effect on the Zn deposition. Since the brighteners more suppressed the Ni deposition than Zn deposition, the Ni content in deposited films decreased with an addition of brighteners. When the brightener of a straight-chain polymer composed of a quaternary ammonium cation (PQ) which can suppress the diffusion of ZnO₂²⁻ and Ni ions in solution was added, the Ni content in deposited films increased with increasing current density at high current density region. This is attributed to that Zn which is preferentially deposited over Ni earlier reached the diffusion limitation of ZnO_2^{2-} ions and Ni deposition didn't reach the diffusion-limited current density. When both PQ and a quaternary ammonium salt with a benzene ring were added in solution, the films obtained at the diffusion-limited current density of ZnO_2^{2-} ions exhibited the smooth surfaces composed of fine crystals. With an addition of brighteners to increase the overpotential for deposition, the γ -phase (intermetallic compound of Ni₂Zn₁₁) of the deposited films was formed easily.
- Keywords: zincate; zinc-nickel alloy; electrodeposition; brightener; anomalous codeposition; polarization curve; current density; transition current; current efficiency; diffusion.



Received on Oct. 12, 2022; Accepted on Nov. 16, 2022

^{*} Corresponding author. E-mail: nakano@zaiko.kyushu-u.ac.jp, Address: Kyushu University, 744 Motooka Nishi-ku Fukuoka 819-0395



© 2023 The Iron and Steel Institute of Japan. This is an open access article under the terms of the Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives license (https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/).



各種光沢剤を含むジンケート浴からの Zn-Ni合金電析挙動とその微細構造

村上 亘¹⁾·大上 悟²⁾·谷ノ内 勇樹²⁾ ◎·赤松 慎也³⁾·中野 博昭^{2)*} ◎

Electrodeposition Behavior of Zn-Ni Alloy from Alkaline Zincate Solutions Containing Various Brighteners and its Microstructure Wataru Murakami, Satoshi Oue, Yu-ki Taninouchi, Shinya Akamatsu and Hiroaki Nakano

1. 緒言

電気Zn-Ni合金めっき鋼板は,耐食性に優れているため,自動車エンジン回りの部品,家庭電化製品,建材用部品などにおいて幅広く使用されている¹⁻⁷⁷。Zn-Ni合金電析は,通常,硫酸塩浴や塩化物浴から行われるが,皮膜の均一電着性については,ジンケート浴からの電析の方が優れることが知られている^{8,99}。硫酸塩浴,塩化物浴からのZn-Ni合金電析については,従来より多数の研究が行われており,実用的な電流密度の領域では,電気化学的に卑なZnが貴なNiより優先析出する変則型共析挙動を示すことが知られている¹⁰⁻¹⁴。

一方、ジンケート浴からのZn-Ni合金の電析挙動は、 電析条件に応じて正常型を示す場合と変則型を示す場合 が報告¹⁵⁻²⁰⁾ されているが, 硫酸塩浴, 塩化物浴からの場合 に比べて研究例が少ない。更にジンケート浴からの電析に おいては、通常、浴中に光沢剤が添加されているが、その 電析挙動への影響については不明な点が多い。そこで著者 らは、前報にて光沢剤としてエピクロルヒドリンとイミダ ゾールの反応物 (IME) を添加した浴からのZn-Ni合金電 析挙動について調査し、IMEは、電析挙動が正常型から変 則型へ移行する転移電流密度, 電析膜のNi含有率および合 金電析の電流効率を低下させることを報告した²¹⁻²⁶⁾。しか し、Zn-Ni合金電析において溶液中のイオンの拡散律速 となる高電流密度域における光沢剤の影響については明 らかにされていない。また、IMEは電析における電荷移動 過程を抑制する光沢剤であるが,光沢剤の中には溶液中の イオンの拡散を抑制する作用があるものも報告されてい 3 27-30)

例えば、第四級アンモニウムカチオンが直鎖状に結合した高分子 (PQ) は、ジンケート浴からの純Znめっきにお

いて, ZnO₂²⁻イオンの拡散を抑制することが報告されてお り, ベンゼン環を含む第四級アンモニウム塩 (QA) が共存 すると, 拡散の抑制効果が更に大きくなると報告されてい る²⁷⁻³⁰⁾。そこで, 本研究では, IMEに加えて, ジンケート 浴からの純Znめっきの光沢剤として, ZnO₂²⁻イオンの拡 散を抑制することが報告されている第四級アンモニウム カチオンが直鎖状に結合した高分子 (PQ) およびベンゼン 環を含む第四級アンモニウム塩 (QA) を選定し, 10~5000 A·m⁻²の広電流密度域でのZn – Ni 合金電析挙動に及ぼす 光沢剤の影響をZn, Ni析出および水素発生の部分分極曲 線に基づき考察した。

2. 実験方法

Table 1 にジンケート浴の電解液組成および電解条件を示す。電解液は市販の特級試薬を用い,常温にてZnO 0.15 mol·dm⁻³, NiSO₄·6H₂O 0.016 mol·dm⁻³, N (CH₂CH₂OH)₃ 0.34 mol·dm⁻³, NaOH 2.5 mol·dm⁻³を純水に溶解させて作製した。この溶液にTable 2 に示す光沢剤を添加した。ベンゼン環を含む第四級アンモニウム塩(以下,QAと称す)を0.07 g·dm⁻³,第四級アンモニウムカチオンが直鎖状に結合した高分子(分子長20 nm,以下,PQと称す)を1.45 g·dm⁻³,エピクロルヒドリンとイミダゾールの反応物(以下,IMEと

Table 1. Solution compositions and electrolysis conditions.

ZnO	(mol·dm ⁻³) 0.15	Current density (A	\ ∙m ⁻²)	10 ~ 5000
NiSO4·6H2O	(mol·dm ⁻³) 0.016	Temperature (K)		308
N(CH ₂ CH ₂ OH) ₃	(mol·dm ⁻³) 0.34	Amount of charge	$(C \cdot m^{-2})$	105
NaOH	(mol·dm ⁻³) 2.5	Cathode	Cu or Fe	$(1 \times 2 \text{ cm}^2)$
Brightener	$(ml \cdot dm^{-3}) 0 \sim 4.5$	Anode	Pt	$t (1 \times 2 \text{ cm}^2)$
		Quiescent bath		

²⁰²²年10月12日受付 2022年11月16日受理 (Received on Oct. 12, 2022; Accepted on Nov. 16, 2022)

3) ユケン工業(株) (Yuken Industry Co., Ltd.)

Corresponding author. E-mail: nakano@zaiko.kyushu-u.ac.jp, Address: Kyushu University, 744 Motooka Nishi-ku Fukuoka 819-0395



© 2023 The Iron and Steel Institute of Japan. This is an open access article under the terms of the Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives license (https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja).

¹⁾ 九州大学大学院工学府(現:三井金属鉱業(株)) (Graduate School of Engineering, Kyushu University, now Mitsui Mining & Smelting)

²⁾ 九州大学大学院工学研究院 (Faculty of Engineering, Kyushu University)

称す)を3 ml·dm⁻³となるように添加した。PQは, ZnO₂²⁻ イオンの拡散抑制剤として, QAはPQの補助剤として, またIMEは電析における電荷移動抑制剤として添加した。な お, IMEは、既報^{31,32)}に従い作製した。

電析は、定電流電解法により電流密度10~5000 A·m⁻², 通電量10⁵ C·m⁻²,浴温303 Kにおいて無撹拌下で行なっ た。通電量10⁵ C·m⁻²は、電流効率100%で純Znの電析を仮 定すると膜厚4.7 μmに相当する。陰極にはCu板(1 cm×2 cm),陽極にはPt板(1 cm×2 cm)を用いた。ただし、SEM 観察,XRD解析用のサンプルを作製する際は、陰極にはFe 板(1 cm×2 cm)を用いた。電析合金組成,Zn,Ni電析の 電流効率は、得られた電析膜を硝酸で溶解し、ICP発光分 光分析法によりZn,Niを定量することで求めた。水素発生 の電流効率は、100からZn,Ni析出の電流効率(%)を差し 引いて求めた。Zn,Ni析出および水素発生の部分電流密度 は、全電流密度にそれぞれの電流効率(%)/100を乗じて算 出した。分極曲線を測定する際、参照電極としてAg/AgCl 電極(飽和KCl, 0.199 V vs. NHE, 298 K)を使用したが、電 位は標準水素電極基準に換算して表示した。

電析膜の表面形態観察は走査型電子顕微鏡 (SEM) を, また相同定はX線回折装置 (Cu-K α, 管電圧 40 kV, 管電流 15 mA)を用いて行った。

3. 実験結果

3・1 Zn-Ni合金の電析挙動に及ぼす光沢剤の影響

Fig.1にZn-Ni合金電析の全分極曲線を示す。浴温298 Kにて純Znが析出すると仮定した場合のZn電析 (ZnO₂²⁻+2H₂O+2e⁻→Zn+4OH⁻)の平衡電位 E_{Zn}^{eq} は-1.27 V である³³⁾。また、Ni²⁺イオンにはトリエタノールアミン (TEA)が2配位しており、その錯安定化定数K=10^{4,74}を基 に浴温298 Kにて純Niが析出すると仮定した場合に算出さ れるNi電析 (Ni (TEA)₂²⁺+2e⁻→Ni+2TEA)の平衡電位 E_{Ni}^{eq} は-0.41Vである³⁴⁾。全分極曲線は、光沢剤の有無に 関わらずZnの平衡電位 (-1.27 V)より貴な電位域で立ち 上がり、電流密度が20-50 A·m⁻²を超えると大きく卑な電 位域に移行し、Znの平衡電位に到達すると再度立ち上がっ た。電流密度が約20-50 A·m⁻²において、陰極電位が大き く卑な方に移行する電流密度を見ると,光沢剤がない場合 は,約50 A·m⁻²であるのに対して,光沢剤を添加した場合 は,その種類に関わらず,約20 A·m⁻²と低くなった。

光沢剤の相違に着目すると、Znの平衡電位より貴な電 位域では、IMEを添加すると最も大きく分極しており、そ の次にPQ+QA、PQの順で分極が大きくなった。QAによ る分極はほとんど見られなかった。一方、Znの平衡電位よ り卑な電位域では電流密度により、光沢剤の影響が異なっ た。200-500 A·m⁻²の電流密度域では光沢剤を添加すると 分極しているのに対して、2000 A·m⁻²以上の高電流密度域 では、何れの光沢剤においても復極効果が見られた。

Fig.2にZn-Ni合金電析におけるZn析出の部分分極曲線を示す。Znの平衡電位(-1.27 V)より貴な電位域においてもZnの部分電流密度が検出され、その電流密度は光沢剤無しおよびQAを添加した溶液において比較的大きかった。Znの平衡電位より卑な電位域では、Znの部分電流密度100-300 A·m⁻²の電流密度域では、Znの析出は光沢剤を添加すると光沢剤の種類に関わらず抑制された。PQを添加すると光沢剤の種類に関わらず抑制された。PQを 共存させるとその拡散限界電流密度が低下した。Znの部分電流密度が300 A·m⁻²を超える高電流密度域では、IME、 QAによるZn電析の抑制効果は特に見られなかった。



Fig. 1. Total polarization curves in Zn-Ni alloy solutions containing various additives.

Symbol	Chemical agents	Suppression effect	Amount of addition
QA	Quaternary ammonium salt with a benzene ring	Adjuvant for PQ	0.07 (g·dm ⁻³)
PQ	Straight-chain polymers composed of quaternary ammonium cation	Diffusion of ions in solution	1.45 (g·dm ⁻³)
PQ + QA	—	Diffusion of ions in solution	1.45 + 0.07 (g·dm ⁻³)
IME	Reaction product of epichlorohydrin and imidazole	Charge transfer of deposition	3.0 (ml·dm ⁻³)

Table 2. Details of brighteners used in this study.

Fig.3にZn-Ni合金電析におけるNi析出の部分分極曲 線を示す。Znの平衡電位(-1.27 V)より貴な電位域では, Ni電析はIMEを添加すると最も大きく抑制されており,そ の次にPQ+QA, PQの順で抑制が大きかった。QA添加に よる抑制効果はNiの部分電流密度4A·m⁻²以下ではほと んど見られなかったが,4A·m⁻²を超えると抑制効果が見 られた。一方,Znの平衡電位より卑な電位域ではNiの部分 電流密度10A·m⁻²以上の領域では,Niの析出は光沢剤を 添加すると光沢剤の種類に関わらず抑制された。特にPQ, PQ+QAを添加するとNiイオンの拡散律速により部分電 流密度が低くなる領域が見られたが,Zn電析の場合とは異 なり,Niイオンの拡散限界電流密度には到達していなかっ た。

Fig.4にZn-Ni合金電析における水素発生の部分分極曲線を示す。Zn-Ni合金浴からの水素発生は、Znの平衡電



Fig. 2. Partial polarization curves of Zn during Zn–Ni alloy deposition from solutions containing various additives.



Fig. 3. Partial polarization curves of Ni during Zn–Ni alloy deposition from solutions containing various additives.

位より貴な領域では、光沢剤の有無に関わらず電位の卑な 方向への移行とともに一旦減少し、Znの平衡電位より卑な 領域になると増加に転じた。水素発生に及ぼす光沢剤の影 響に着目すると、Znの平衡電位より貴な領域では、同一電 流密度(10 A·m⁻²)における水素発生電位は、光沢剤添加 により卑に移行していることが分かる。IMEを添加すると 最も卑に移行しており、その次にPQ+QA、PQの順で移行 しており、Zn、Ni析出に対する場合と同様の傾向を示し た。一方、Znの平衡電位より卑な電位域では、水素の部分 電流密度10-200 A·m⁻²の領域で、光沢剤による水素発生の 抑制効果が見られ、特にQAによる抑制効果が大きかった。 しかし、水素の部分電流密度が1000 A·m⁻²以上になると、 光沢剤による水素発生の抑制効果は無くなり、逆に促進効 果が見られた。

Fig.5にZn-Ni合金電析におけるZn-Ni, Zn, Ni析出の 電流効率と電流密度の相関関係を示す。以下に示すZn-Ni合金電析の電流効率は、Zn析出とNi析出の電流効率を 足したものである。Fig.5 (a) に示すように合金電析の電流 効率は、光沢剤が無い場合、10~50 A·m⁻²の低電流密度域 (Znの平衡電位より貴な領域) では15~30%程度と低かっ たが、電流密度が50 A·m⁻²を超えると急激に増加し、100 A·m⁻² (Znの平衡電位より卑で電荷移動律速の領域) で最 大となり、電流密度が500 A·m⁻²以上 (Znの平衡電位より 卑でイオン拡散律速の領域) に増加すると電流効率は大き く低下した。一方、光沢剤を添加すると、その種類に関わ らず、電流効率は電流密度20 A·m⁻²を超えると急激に増 加し50 A·m⁻²で最大となり更に電流密度が増加すると低 下した。光沢剤を添加すると、電流効率が急激に増加する 電流密度が低電流側にシフトした。

光沢剤による相違に着目すると、10~20 A·m⁻²の低電流 密度域 (Znの平衡電位より貴な領域)では、IME、PQを添 加すると電流効率はほぼゼロまで低下した。しかし、QA



Fig. 4. Partial polarization curves of H₂ during Zn–Ni alloy deposition from solutions containing various additives.

添加による電流効率の低下はほとんど見られなかった。50 ~500 A·m⁻²の中電流密度域 (Znの平衡電位より卑で電 荷移動律速の領域) では, IMEを添加すると電流効率は最 も低下し, PQを添加するとその次に電流効率は低下した。 1000 A·m⁻²以上の高電流密度域 (Znの平衡電位より卑で イオン拡散律速の領域) では, PQ+QAの添加で電流効率 の低下が最も大きく, その次にPQ添加で電流効率は低下 した。なお, QAを添加すると, 200 A·m⁻²以上の電流密度 域で, 無添加に比べ, 電流効率が若干増加した。

合金電析の際のZn析出の電流効率(Fig.5 (b))は、光沢 剤が無い場合の10~50 A·m⁻²、光沢剤がある場合の10~ 20 A·m⁻²での低電流密度域では、非常に低かったが、それ ぞれ電流密度が50、20 A·m⁻²を超えると急増した。電流密 度50 A·m⁻²以上の領域でのZn析出の電流効率に及ぼす光 沢剤の影響は、先に述べたZn-Ni合金電析の電流効率に 及ぼす場合と同一であった。合金電析の際のNi析出の電流 効率に及ぼす光沢剤の影響は、特に10~20 A·m⁻²の低電流 効率に及ぼす光沢剤の影響は、特に10~20 A·m⁻²の低電流 対率に及ぼす光沢剤の影響は、特に10~20 A·m⁻²の低電流 対率に及ぼす光沢剤の影響は、特に10~20 A·m⁻²の低電流 対率に及ぼす光沢剤の影響は、特に10~20 A·m⁻²の低電流 対率に及ぼす光沢剤の影響は、特に10~20 A·m⁻²の低電流 対率に及ぼす光沢剤の影響は、特に10~20 A·m⁻²の低電流 対率に及ぼす光沢剤の影響は、特に10~20 A·m⁻²の低電流 対応で認められ、IME、PQを添加すると電流効率はほぼ ゼロまで低下した(Fig.5 (c))。Fig.5 (a)、(b)、(c)の比較 より、Zn-Ni合金電析の電流効率は、光沢剤の有無に関わ らず、低電流密度域(Znの平衡電位より鼻で電荷移動律 速の領域)および高電流密度域(Znの平衡電位より卑でイ オン拡散律速の領域)ではZn析出の電流効率を反映した ものである事が分かった。IME, PQは,低電流密度ではNi 析出の電流効率に影響を及ぼし,中電流密度域および高電 流密密度域ではZn析出の電流効率に影響を及ぼした。

Fig.6にZn-Ni合金電析膜のNi含有率に及ぼす電流 密度の影響を光沢剤毎に示す。図中の破線は、Niについ てその浴組成と合金組成が等しい場合を示す組成参照線 (Composition reference line, 以下CRLと略す) である。電析 膜のNi含有率がこの線の上部に位置していれば、電気化 学的に貴なNiが優先析出する正常型共析であり、下部に 位置していれば卑なZnが優先析出する変則型共析となる ことを示す。Fig.6 (a) に示すように、光沢剤が無い場合、 Ni含有率は50~100 A·m⁻²の領域で大きく変化した。50 A·m⁻²以下ではNi含有率は90 mass%前後とCRLより上部 にあり, 正常型共析となるのに対して, 100 A·m⁻²以上で はCRLを下回り変則型共析となった。電析挙動が正常型 から変則型へ移行する電流密度は転移電流密度と称され る³⁵⁻³⁷⁾。光沢剤を添加すると、その種類に関わらず、Ni含 有率は20~50 A·m⁻²の領域で大きく変化し、100 A·m⁻²以 上ではCRLを下回り変則型共析となった。すなわち、 転移 電流密度は、光沢剤の種類に関わらずそれを添加すると低 下した。この転移電流密度は、光沢剤の有無に関わらず、 Fig.1に示す全分極曲線の電位がZnの平衡電位より貴な領 域から卑な領域に急激に移行する電流密度および合金電 析の電流効率が大きく変化する電流密度(Fig.5)と一致し



Fig. 5. Current efficiencies for Zn-Ni alloy deposition from solutions containing various additives. [(a) Zn-Ni, (b) Zn, (c) Ni]

ている。光沢剤による相違に着目すると、10~20 A·m⁻²の 低電流密度域では、Ni含有率はIMEを添加すると最も低下 し、その次にPQ+QA、PQの順で低下しており、QA添加 による影響は見られなかった。

変則型共析となる領域のNi含有率を拡大した図をFig.6 (b) に示す。50~500 A·m⁻²の電流密度域では、光沢剤を添 加すると総じてNi含有率は若干低下した。しかし、PQ、PQ +QAを添加した溶液では、電流密度が1000 A·m⁻²以上に なるとNi含有率が増加するという特徴的な挙動が認めら れた。

3・2 電析膜の外観, 微細構造に及ぼす光沢剤の影響

Fig.7に種々の光沢剤を含む溶液から200, 2000 A·m⁻²で 得られたZn-Ni合金電析膜の外観を示す。なお、一部の 供試材については、対面に置いた文字を撮影時に反射させ







Fig. 7. Appearance of Zn-Ni alloy films deposited from solutions containing various additives. (Online version in color.)

たものを示しており、その文字が明瞭になるほど、光沢度 が高いことを表している。光沢剤が無い場合、何れの電流 密度においても電析膜は灰色で無光沢であった。QAを添 加しても無添加の場合とほぼ同様であり、PQを添加する と2000 A·m⁻²において光沢が生じ、PQ+QAの添加で光 沢は更に顕著となった。IMEを添加した場合には表面に光 沢ムラが見られた。

Fig.8に中電流密度200 A·m² (Znの平衡電位より卑で電 荷移動律速の領域)にて得られた電析膜の表面SEM像を示 す。なお、200 A·m²は、変則型共析の領域にあり、光沢剤の 有無、種類に関わらず電析膜のNi含有率は7.1~8.6 mass% であり、供試材毎の差は小さい(Fig.6 (b))。光沢剤を含ま ない溶液から得られた電析膜(a)には、0.2 μm前後の粒状 の結晶が見られた。電析膜(a)と比較してQA(b), PQ(c), PQ+QA(d)添加により結晶が微細化した。特にQA(b) 添加による微細化が顕著であった。IMEを添加すると(e), 平滑部の上に数μmサイズの大きな粒状結晶が見られた。 この大きな粒状結晶は微細な結晶の集まりと考えられる。

Fig.9に各種光沢剤を含む溶液において200 A·m⁻²で得ら れた電析膜 (Ni含有率7.1~8.6 mass%)のX線回折図形を 示す。光沢剤がない場合 (a),メインピークはη-Zn相に由 来するものであり、γ相 (Ni₂Zn₁₁の金属間化合物)に由来す る弱いピークも見られた。光沢剤QAを添加しても (b),無 添加の場合と同様の傾向を示したが、γ相のピークが無添 加の場合より強くなった。PQを添加すると (c),基板のFe 以外は、γ相のピークのみとなり、η-Zn相のピークは見ら れなかった。PQ+QA (d), IME (e)を添加した場合も、PQ を添加 (c) した場合とほぼ同様の傾向を示した。電析膜 のNi含有率は、光沢剤がない場合、QAを添加した場合で それぞれ, 8.0, 8.6 mass% であるのに対して, PQ, PQ+QA, IMEを添加した場合はそれぞれ7.1, 7.3, 7.8 mass% となって おり, PQ, PQ+QA, IMEの添加では電析膜のNi含有率が 低下するにも関らず, γ相のみが形成された。

Fig.10に高電流密度2000 A·m² (Znの平衡電位より卑で イオン拡散律速の領域) にて得られた電析膜の表面SEM 像を示す。2000 A·m²にて得られた電析膜のNi含有率は6.3 ~9.3 mass%であった (Fig.6 (b))。光沢剤を含まない溶液 から得られた電析膜(a)は1 µm前後の粒状結晶から構成 された。QA (b) を添加すると結晶が粗大化したが, PQ (c) を添加すると, 結晶は微細となり, PQ+QA (d) を添加す ると結晶は更に緻密となり平滑な表面形状を示した。IME を添加すると (e), 結晶は微細となったが, 若干凹凸が見 られた。ところで、光沢剤を含まない溶液からの電析膜の 結晶サイズは高電流密度2000 A·m⁻²で1 µm前後 (Fig.10 (a)) であるのに対して、中電流密度200 A·m⁻²では0.2 μm 前後(Fig.8(a))と電流密度が高い方が結晶が大きくなっ た。通常,電流密度が高くなると核生成が優先し,結晶が 微細化するが本研究の結果は逆の傾向を示した。Zn 電析に おいて, Zn²⁺イオンの拡散律速の条件下では, 電析物の凸 部に電流が集中し結晶サイズが大きくなることが報告され ている³⁸⁾。本研究の2000 A·m⁻²では, Zn, Ni 析出が ZnO₂²⁻, Niイオンの拡散律速となっており (Fig.1-3), このため結晶 サイズが大きくなったと考えられる。

Fig.11に各種光沢剤を含む溶液において2000 A·m⁻²で得 られた電析膜 (Ni含有率6.3~9.3 mass%)のX線回折図形 を示す。光沢剤がない場合 (a),メインピークは η -Zn相に 関するものであり、わずかに γ 相 (Ni₂Zn₁₁の金属間化合物) に関するピークも見られた。QAを添加すると (b), γ 相の



Fig. 8. SEM images of the Zn–Ni alloy films deposited at 200 A·m⁻² from the solution containing various additives. [(a) Additive-free, (b) QA, (c) PQ, (d) PQ + QA, (e) IME]

ピークが主となり η -Zn相に関するピークも見られた。PQ を添加すると (c), γ 相のピークが主となりわずかに η -Zn 相に関するピークも見られたが, PQ + QA添加では (d), 基板のFe以外は, γ 相のみのピークとなり, η -Zn相のピー クは見られなかった。IMEを添加すると (e), γ 相のピーク が主ではあったが, η -Zn相に関するピークも見られた。な お, 電析膜のNi含有率は, 光沢剤がない場合, 6.7 mass%で あるのに対して, QA, PQ, PQ + QA, IMEを添加した場合は それぞれ6.6, 8.0, 9.3, 6.3 mass%であった。

以上のFig.9, 11の結果より, 200, 2000 A·m⁻²で得られた 電析膜は共に,光沢剤がない場合は,主にη-Zn相から構成 されるが, PQ, PQ + QA, IME を添加すると主にγ相から構 成されることが分かった。QA添加の場合は, 200 A·m⁻²に 比べ2000 A·m⁻²で得られた電析膜の方がγ相が優勢となっ たが,無添加およびQA以外の光沢剤を添加した場合は, γ 相の形成に及ぼす電流密度の影響は特に見られなかった。



Fig. 9. X-ray diffraction patterns of the Zn–Ni alloy films deposited at 200 A·m⁻² from the solution containing various additives. [(a) Additive-free, (b) QA, (c) PQ, (d) PQ + QA, (e) IME] (\circ Fe PDF # 65-4899, \bullet Zn[η] PDF # 87-0713, and \bigstar Ni₂Zn₁₁[γ] PDF # 65-5310) (Online version in color.)



Fig. 10. SEM images of the Zn–Ni alloy films deposited at 2000 A·m⁻² from the solution containing various additives. [(a) Additive-free, (b) QA, (c) PQ, (d) PQ + QA, (e) IME]

4. 考察

アルカリジンケート浴からのZn-Ni合金電析挙動,電 析膜の形態に及ぼす光沢剤の影響をまとめた結果をTable 3に示す。PQを添加すると、Zn電析の拡散限界電流密度 が出現し、QAを共存させるとその拡散限界電流密度が低 下した(Fig.2)。また、PQ、PQ+QAを添加するとNiイオ ンの拡散律速によりNi部分電流密度が低くなる領域が見 られた(Fig.3)。すなわち、今回検討した光沢剤PQには、 電解液中のZnO₂²⁻、Niイオンの拡散を抑制する効果があ り、その効果はQAが共存すると更に顕著となった。一方、 IMEは、電荷移動過程が律速となるZn部分電流密度100-300 A·m⁻²の領域およびNi部分電流密度10-20 A·m⁻²の領 域において、Zn、Niの析出を抑制した(Fig.2,3)。すなわち、 IMEには、Zn-Ni合金電析における電荷移動反応を抑制 する効果が見られた。電析挙動が正常型から変則型に移行 する転移電流密度,合金電析の電流効率,電析膜の組成, 電析膜の形態に及ぼす光沢剤の影響はその種類により異な ることが分かった。以下,その要因について低電流密度域 (Znの平衡電位より貴で正常型共析の領域),中電流密度 域 (Znの平衡電位より卑で電荷移動律速,変則型共析の領 域),高電流密度域 (Znの平衡電位より卑でイオン拡散律 速の領域) 毎に考察する。

4・1 Zn-Ni合金の電析挙動に及ぼす光沢剤の影響

 4・1・1 低電流密度域 (Znの平衡電位より貴で正常型共 析の領域)

本研究のZn-Ni合金電析における転移電流密度は,光 沢剤が無い場合は50~100 A·m⁻²であるのに対して,光沢 剤を添加した場合はその種類に関わらず20~50 A·m⁻²と なり,光沢剤の添加により大きく低下した (Fig.6 (a))。こ



Fig. 11. X-ray diffraction patterns of the Zn–Ni alloy films deposited at 2000 A·m⁻² from the solution containing various additives. [(a) Additive-free, (b) QA, (c) PQ, (d) PQ + QA, (e) IME] (○ Fe PDF # 65-4899, • Zn[η] PDF # 87-0713, and ★ Ni₂Zn₁₁[γ] PDF # 65-5310) (Online version in color.)

Table 3. Summary of effect of brightener on the deposition behavior of Zn-Ni alloy and its morphology.

	QA	PQ	PQ + QA	IME
Suppression effect	Charge transfer	Diffusion of ions	Diffusion of ions	Charge transfer
Transition C.D.	Decrease	Decrease	Decrease	Decrease
$i_{\text{Lim}} \text{ of } Zn$	Not affected	Decrease	Decrease	Not affected
	Not affected Not affected	Decrease Increase	Decrease Increase	Decrease Decrease
$\label{eq:current Efficiency} \begin{array}{c} Current Efficiency\\ at C.D. < 1000 \ A \cdot m^{-2}\\ at C.D. > 1000 \ A \cdot m^{-2} \end{array}$	Not affected Increase	Decrease Significantly decrease	Decrease Significantly decrease	Significantly decrease Decrease
Morphology at 2000 A·m ⁻²	Coarsening	Smooth	Significantly Smooth	Smooth

こで、Zn-Ni合金電析における転移電流密度は、水素発生 が抑制されるほど低くなることが報告されている³⁹⁻⁴²⁾。H⁺ の還元反応は吸着中間体 H_{ad} を経由した多段階還元機構に より進行し、 H_{ad} が吸着できるサイトが制限されているた め、Zn(OH)₂が形成されると水素発生が抑制されることが 報告されている³⁹⁻⁴²⁾。また、光沢剤としてIMEを添加する と水素発生が抑制され、転移電流密度が低下することも報 告されている²¹⁻²⁶⁾。

Znの平衡電位より貴な領域では水素発生は、PQ, PQ +QA添加により抑制されていることが分かる (Fig.4)。 これは、H_{ad}が吸着できるサイトが制限されているため Zn(OH)₂, IMEと同様にPQ, PQ+QAが水素発生を抑制す ると考えられる。Zn-Ni合金電析においてPQ, PQ+QA を添加すると水素発生が抑制されるため、転移電流密度は 低下したと考えられる。しかしながら、QA添加では、Zn の平衡電位より貴な電位域において水素発生がほとんど抑 制されていないにも関わらず (Fig.4),転移電流密度はPQ, IMEを添加した場合と同様に低下した。また、光沢剤の種 類により水素発生の抑制の程度が異なるにも関わらず、光 沢剤を含む溶液からの転移電流密度はほぼ同一となった (Fig.6 (a))。この要因については現状不明である。

ところで、Fig.2に示すように光沢剤無しおよびQAを 添加した溶液において、Znの平衡電位より貴な-0.9 V前 後においてもZnが顕著に析出しており、見掛け上Znの Underpotential co-depositionが生じた。Zn-Ni合金電析に おけるZnのUnderpotential co-depositionは、電析により安 定な金属間化合物Ni₅Zn₂₁が形成され、電析膜のZnの活量 係数がかなり小さくなるため生じることが報告されてい る⁴²⁻⁴⁵⁾。すなわち、ZnのUnderpotential co-depositionが生じ るためにはNiの共析が必須となり、本研究においては、光 沢剤無しおよびQAを添加した溶液においてZnの平衡電 位より貴な-0.9 V前後においてもNiの析出が顕著である ため、ZnのUnderpotential co-depositionが進行したと考えら れる。

4・1・2 中電流密度域 (Znの平衡電位より卑で電荷移動 律速,変則型共析の領域)

Zn-Ni合金電析における電流効率に及ぼす光沢剤の影響については、PQ、IMEは、Zn、Ni電析の両方を抑制しており(Fig.2, 3)、このため変則型共析の領域で電流効率が低下したと考えられる(Fig.5 (a))。Znの部分電流密度300 A·m⁻²以下の電流密度域、すなわちZn電析の電荷移動過程律速の領域では、何れの光沢剤においてもZn電析に対する抑制効果がみられ、その抑制効果はIMEが最も大きかった(Fig.2)。全電流密度50~500 A·m⁻²の電荷移動過程 律速の領域で、IMEを添加すると電流効率が最も低下したのは(Fig.5 (a), (b))、Zn電析に対する抑制効果が最も大きいためと考えられる。

一方, 電析膜組成に及ぼす光沢剤の影響については, PQ,

PQ+QAを添加すると、Ni含有率は100~500 A·m⁻²において低下している(Fig.6 (b))ことからNi析出の方がより強く抑制されることが分かる。光沢剤としてIMEを添加するとNi含有率が低下することが既に報告されている²¹⁻²⁶⁾。Ni電析において中間体NiOH_{ad}が吸着できるサイトが制限されていると仮定すれば、IMEを添加した場合、その吸着により限定されたNiOH_{ad}の吸着サイトが封鎖され、Ni電析の方がより強く抑制されると考察されている²¹⁻²⁶⁾。PQ、PQ+QAの添加においても同様のことが推察される。

 4・1・3 高電流密度域 (Znの平衡電位より卑でイオン拡 散律速の領域)

Znの部分電流密度300 A·m⁻²以上の高電流密度域では、 光沢剤がない場合,Zn電析はZnO22-イオンの拡散律速と なっており、その領域ではIME, QAによる分極効果が見 られなくなった (Fig.2)。これは, IME, QAには, ZnO_2^{2-1} オンの拡散を抑制する効果がないためと考えられる。それ に対してPQ添加浴では、Znの部分電流密度200 A·m⁻²前 後でZn析出が拡散限界電流密度に到達しており (Fig.2), PQはZnO2²⁻イオンの拡散を抑制していることが分かる。 PQにQAを加えるとZn析出の拡散限界電流密度は更に低 下しており、PQとQAにはZnO₂²⁻イオンの拡散を抑制す る相乗効果が見られた。Ni電析に及ぼす光沢剤の影響につ いても、Zn電析とほぼ同様の傾向が見られた(Fig.3)。PO、 PQ+QAを添加するとZn, Ni 析出がZnO₂²⁻, Ni イオンの拡 散律速に到達し易くなっており (Fig.2, 3), このため1000 A·m⁻²以上の高電流密度域では電流効率がより低下したと 考えられる (Fig.5)。なお、Znの平衡電位より卑な領域に おいて、QAを添加した溶液では、水素発生が抑制されて いた (Fig.4)。QA を添加した溶液で200~2000 A·m⁻²の中 電流密度および高電流密度域においてZn-Ni合金電析の 電流効率が増加した (Fig.5 (a))のは、水素発生が抑制され るためと考えられる。

PQ, PQ+QAを添加した溶液では、電流密度が1000 A·m⁻²以上になると電析膜のNi含有率が増加するという 特徴的な挙動が見られた(Fig.6 (b))。これは、Niに対して 優先析出するZnの方が先にZnO₂²⁻イオンの拡散限界とな りNi析出はまだ拡散限界電流密度に到達していないため (Fig.2, 3),電流密度の増加に伴い、電析膜のNi含有率は増 加したと考えられる。PQには、溶液中のイオンの拡散を抑 制する作用があるため、このような電流密度の増加に伴い Ni含有率が増加するという特徴的な挙動が生じたと考え られる。このPQ, PQ+QAの添加によりZnO₂²⁻イオンの 拡散が抑制される挙動は、ジンケート浴からの純Znめっ きにおいて報告されているものと同一であり²⁷⁻³⁰⁾、Zn-Ni 合金電析においても同様の傾向が見られた。ZnO₂²⁻イオン の拡散に及ぼすPQとQAの相乗効果の要因については、こ れまでに報告されておらず不明である。

PQは直鎖状高分子であり、QAは第四級アンモニウム塩

の単体である。分子量の大きいPQは複数の吸着座を持ち 陰極面の広いサイトに渡り吸着するのに対して、分子量の 小さいQAは、局所的なサイトに吸着することが予想され る。そのため、PQの吸着サイトの隙間にQAが吸着して添 加剤の被覆率が増加している可能性がある。添加剤の被覆 率が増加する、すなわち添加剤の濃度が高くなると仮定す れば、拡散層を含む陰極界面での溶液の粘度が上昇し拡散 層でのイオンの拡散が抑制されると説明できる。

4・2 Zn-Ni合金電析膜の微細構造に及ぼす光沢剤の影響

拡散限界電流密度下での電析では、通常、電析膜は粒 状またはデンドライト状となることが報告されている i^{46} 、本研究のPQ+QAを添加した溶液からの電析では、 ZnO₂²⁻イオンの拡散限界電流密度下 (2000 A·m⁻²) での電 析にも関わらず、平滑な外観を呈した (Fig.10)。PQ+QA は、合金電析における電荷移動過程を抑制することに加 えて、溶液中のZnO₂²⁻、Niイオンの拡散を抑制している (Fig.2, 3)。その結果、電析膜の結晶成長が抑制され、核生 成速度が相対的に速くなり、結晶が微細になったと考えら れる。電荷移動過程を抑制する IME を添加した場合も 2000 A·m⁻²では、無添加の場合より平滑になったが (Fig.10)、 PQ+QA添加ほどではなかった。電析膜の平滑性向上に は、溶液中のイオンの拡散抑制も寄与していると考えられ る。

一方, 電析膜の相構造については, 光沢剤を添加すると, 電析膜のNi含有率に関わらず,γ相が形成され易くなった (Fig.9, 11)。特に電析の過電圧を増加させるPQ, IMEを添 加するとその傾向が顕著であった。Zn-Ni系2元系平衡 状態図⁴⁷⁾によると室温でのγ相の安定領域はNi 12.8~16.5 mass%である。PQ, IMEを添加した溶液から200 A·m⁻²に て得られた電析膜は, Ni含有率が7.1, 7.8 mass%であるに も関わらずγ単相となり、平衡状態図から予想される相と は異なっている。γ相の安定領域のNiよりも少ないNi含 有率でγ相単相になる原因としては、γ相にZnが固溶して いることが考えられるが詳細は不明である。電析において は,結晶化過電圧が高くなる,すなわち結晶化過程が抑制 されると、還元された吸着原子が過飽和の状態で結晶化さ れるため急冷合金に類似した非平衡相(あるいは高温相) の膜が得られることが報告されている48)。光沢剤を添加す ると電荷移動過程に加えて結晶化過程を抑制することが報 告されている4%)。本研究においては、光沢剤の添加により 電析の結晶化過電圧が増加するため、還元されたZnとNi の吸着原子 (Znad, Niad) がより過飽和になり、状態図とは異 なる組成域でγ相が形成され易くなったと推察される。

5. 結言

各種光沢剤を含むアルカリジンケート浴 (ZnO 0.15 mol·dm⁻³, NiSO₄·6H₂O 0.016 mol·dm⁻³, N(CH₂CH₂OH)₃ 0.34

mol·dm⁻³, NaOH 2.5 mol·dm⁻³, 303 K) からのZn-Ni合金 電析挙動とその微細構造を調べた結果,以下のことが分 かった。電析挙動が正常型から変則型に移行する転移電流 密度は、光沢剤の添加により低下した。光沢剤の種類によ り水素発生の抑制の程度が異なるにも関わらず、光沢剤を 含む溶液からの転移電流密度はほぼ同一となった。合金電 析の電流効率は、Zn電析を抑制する効果がある光沢剤を 添加すると大きく低下した。光沢剤は、Zn電析よりNi電 析の方をより強く抑制するため、電析膜のNi含有率は、光 沢剤を添加すると低下した。第四級アンモニウムカチオン が直鎖状に結合した高分子 (PQ) を添加すると、溶液中の ZnO^{2⁻}, Niイオンの拡散が抑制され高電流密度域では電流 密度の増加に伴い電析膜のNi含有率が増加するという特 徴的な挙動が見られた。これは、Niに対して優先析出する Znの方が先にZnO₂²⁻イオンの拡散限界となった一方で、 Ni析出は拡散限界に到らなかったためと考えられる。PQ とベンゼン環を含む第四級アンモニウム塩を併せて添加す ると、ZnO2²⁻イオンの拡散限界電流密度下での電析におい て, 膜の結晶は緻密となり平滑な表面形状が得られた。電 析の過電圧を増加させる光沢剤を添加すると、電析膜のNi 含有率に関わらず, γ相 (Ni,Znu 金属間化合物) が形成され 易くなった。

文 献

- R.Ramanauskas: Appl. Surf. Sci., 153(1999), 53. https://doi.org/ 10.1016/S0169-4332(99)00334-7
- 2) Z.Feng, Q.Li, J.Zhang, P.Yang, H.Song and M.An: Surf. Coat. Technol., 270(2015), 47. https://doi.org/10.1016/j.surfcoat.2015.03. 020
- 3) S.H.Mosavat, M.H.Shariat and M.E.Bahrololoom: *Corros. Sci.*, 59(2012), 81. https://doi.org/10.1016/j.corsci.2012.02.012
- 4) O.Girčienė, L.Gudavičiūtė, R.Juškėnas and R.Ramanauskas: Surf. Coat. Technol., 203(2009), 3072. https://doi.org/10.1016/j.surfcoat. 2009.03.030
- 5) Z.Feng, L.Ren, J.Zhang, P.Yang and M.An: RSC Adv., 6(2016), 88469. https://doi.org/10.1039/C6RA18476F
- 6) A.El Hajjami, M.P.Gigandet, M.De Petris-Wery, J.C.Catonne, J.J.Duprat, L.Thiery, F.Raulin, N.Pommier, B.Starck and P.Remy: *Appl. Surf. Sci.*, **254**(2007), 480. https://doi.org/10.1016/j.apsusc. 2007.06.016
- 7) M.Yano, H.Fukushima, H.Nakano and T.Akiyama: *Tetsu-to-Hagané*, 86(2000), 176 (in Japanese). https://doi.org/10.2355/ tetsutohagane1955.86.3_176
- 8) T.Fujigaya: Mekki Gizyutsu Gaido (Electroplating, Chemical Plating & Engineering Guide), the Japan Suppliers Association of Plating Materials, Tokyo, (2004), 143 (in Japanese).
- 9) M.Kawasaki and H.Enomoto: Mekki Kyohon (Textbook for Plating), Nikkan Kogyo Shinbunsya, Tokyo, (1986), 108 (in Japanese).
- A.Brenner: Electrodeposition of Alloys, Vol.2, Academic Press, New York and London, (1963), 194.
- H.Fukushima, T.Akiyama, J.-h.Lee, M.Yamaguchi and K.Higashi: J. Met. Finish. Soc. Jpn., 33(1982), 574 (in Japanese). https://doi. org/10.4139/sfj1950.33.574
- 12) H.Fukushima, T.Akiyama, M.Yano, T.Ishikawa and R.Kammel: *ISLJ Int.*, 33(1993), 1009. https://doi.org/10.2355/isijinternational.33.1009
- 13) H.Nakano, S.Kobayashi, T.Akiyama, T.Tsuru and H.Fukushima:

Tetsu-to-Hagané, **89**(2003), 64 (in Japanese). https://doi.org/10. 2355/tetsutohagane1955.89.1_64

- 14) H.Nakano, M.Matsuno, S.Oue, M.Yano, S.Kobayashi and H.Fukushima: J. Jpn. Inst. Met., 69(2005), 548 (in Japanese). https://doi.org/10.2320/jinstmet.69.548
- 15) M.G.Hosseini, H.Ashassi-Sorkhabi and H.A.Y.Ghiasvand: Surf. Coat. Technol., 202(2008), 2897. https://doi.org/10.1016/j.surfcoat. 2007.10.022
- 16) L.S.Tsybulskaya, T.V.Gaevskaya, O.G.Purovskaya and T.V.Byk: Surf. Coat. Technol., 203(2008), 234. https://doi.org/10.1016/j. surfcoat.2008.08.067
- 17) G.Y.Li, J.S.Lian, L.Y.Niu and Z.H.Jiang: Surf. Coat. Technol., 191(2005), 59. https://doi.org/10.1016/j.surfcoat.2004.04.062
- N.R.Short, S.Zhou and J.K.Dennis: Surf. Coat. Technol., 79(1996), 218. https://doi.org/10.1016/0257-8972(95)02428-X
- 19) C.Müller, M.Sarret and M.Benballa: J. Electroanal. Chem., 519(2002), 85. https://doi.org/10.1016/S0022-0728(01)00725-2
- 20) H.Y.Lee and S.G.Kim: Surf. Coat. Technol., 135(2000), 69. https:// doi.org/10.1016/S0257-8972(00)00731-3
- 21) S.H.Bae, S.Oue, I.Son and H.Nakano: *Tetsu-to-Hagané*, **107**(2021), 229 (in Japanese). https://doi.org/10.2355/tetsutohagane. TETSU-2020-108
- 22) S.H.Bae, S.Oue, I.Son and H.Nakano: *ISIJ Int.*, 61(2021), 2256. https://doi.org/10.2355/isijinternational.ISIJINT-2021-080
- 23) S.H.Bae, S.Oue, Y.-k.Taninouchi, I.Son and H.Nakano: *Tetsu-to-Hagané*, **108**(2022), 120 (in Japanese). https://doi.org/10.2355/ tetsutohagane.TETSU-2021-092
- 24) S.H.Bae, S.Oue, Y.-k.Taninouchi, I.Son and H.Nakano: *ISIJ Int.*, 62(2022), 1522. https://doi.org/10.2355/isijinternational.ISIJINT-2022-076
- 25) S.H.Bae, S.Oue, Y.-k.Taninouchi, I.Son and H.Nakano: *Tetsu-to-Hagané*, **108**(2022), 268 (in Japanese). https://doi.org/10.2355/tetsutohagane.TETSU-2021-105
- 26) S.H.Bae, S.Oue, Y.-k.Taninouchi, I.Son and H.Nakano: *ISIJ Int.*, 62(2022), 1918. https://doi.org/10.2355/isijinternational.ISIJINT-2022-160
- 27) K.Fukumoto, S.Oue, Y.Kikuchi, S.Akamatsu, T.Takasu and H.Nakano: J. Jpn. Inst. Met. Mater., 83(2019), 399 (in Japanese). https://doi.org/10.2320/jinstmet.J2019027
- 28) K.Fukumoto, S.Oue, Y.Kikuchi, S.Akamatsu, T.Takasu and H.Nakano: *Mater. Trans.*, 61(2020), 497. https://doi.org/10.2320/ matertrans.MT-M2019316
- 29) K.Fukumoto, S.Oue, T.Niwa, Y.Kikuchi, S.Akamatsu and H.Nakano: *Mater. Trans.*, 62(2021), 807. https://doi.org/10.2320/ matertrans.MT-M2021027
- 30) K.Fukumoto, S.Oue, T.Niwa, Y.Kikuchi, S.Akamatsu and H.Nakano: J. Jpn. Inst. Met. Mater., 85(2021), 59 (in Japanese). https://doi.org/10.2320/jinstmet.J2020043

- 31) H.Nezu, S.Fujii, N.Kaneko and N.Ofuchi: J. Met. Finish. Soc. Jpn., 32(1981), 17 (in Japanese). https://doi.org/10.4139/sfj1950.32.17
- 32) S.Konishi, S.Eguchi, N.Ozeki and M.Uesugi: J. Met. Finish. Soc. Jpn., 20(1969), 263 (in Japanese). https://doi.org/10.4139/ sfj1950.20.263
- 33) M.Pourbaix: Atlas of Electrochemical Equilibria in Aqueous Solutions, Pergamon Press, New York, (1966), 406.
- 34) D.D.Perrin: Stability Constants of Metal-ion Complexes, Part B: Organic Ligands, Pergamon Press, Oxford, (1979), 466.
- 35) T.Akiyama, H.Fukushima and K.Higashi: Tetsu-to-Hagané, 72(1986), 918 (in Japanese). https://doi.org/10.2355/tetsutohagane 1955.72.8_918
- 36) H.Nakano, S.Shibata, S.Arakawa, S.Oue and S.Kobayashi: ISIJ Int., 53(2013), 1858. https://doi.org/10.2355/isijinternational.53.1858
- 37) H.Nakano, S.Shibata, S.Arakawa, S.Oue and S.Kobayashi: *Tetsu-to-Hagané*, **99**(2013), 346 (in Japanese). https://doi.org/10.2355/tetsutohagane.99.346
- 38) M.Sagiyama, M.Kawabe and T.Watanabe: *Tetsu-to-Hagané*, 76(1990), 1301 (in Japanese). https://doi.org/10.2355/tetsutohagane 1955.76.8_1301
- 39) H.Fukushima and H.Nakano: J. Surf. Sci. Soc. Jpn., 22(2001), 107 (in Japanese). https://doi.org/10.1380/jsssj.22.107
- 40) H.Nakano, T.Ohgai, H.Fukushima, T.Akiyama and R.Kammel: Metall, 55(2001), 676.
- H.Fukushima, T.Akiyama and K.Kiyotani: *Shigen-to-Sozai*, 109(1993), 861 (in Japanese). https://doi.org/10.2473/shigentosozai. 109.861
- 42) H.Nakano, S.Arakawa, Y.Takada, S.Oue and S.Kobayashi: Mater. Trans., 53(2012), 1946. https://doi.org/10.2320/matertrans. M2012241
- 43) H.Nakano, S.Arakawa, Y.Takada, S.Oue and S.Kobayashi: J. Jpn. Inst. Met., 76(2012), 443 (in Japanese). https://doi.org/10.2320/ jinstmet.76.443
- 44) H.Nakano, S.Arakawa, S.Oue and S.Kobayashi: *Tetsu-to-Hagané*, 99(2013), 425 (in Japanese). https://doi.org/10.2355/tetsutohagane. 99.425
- 45) H.Nakano, S.Arakawa, S.Oue and S.Kobayashi: *ISIJ Int.*, 53(2013), 1864. https://doi.org/10.2355/isijinternational.53.1864
- 46) R.Winand: J. Appl. Electrochem, 21(1991), 377. https://doi.org/10. 1007/BF01024572
- 47) M.Hansen: Constitution of Binary Alloys, McGraw-Hill Book, New York, (1958), 1060.
- 48) S.Haruyama: Hyomen Gizyutsusya no tameno Denkikagaku (Electrochemistry for Surface Engineer), Maruzen, Tokyo, (2005), 155 (in Japanese).
- 49) S.Haruyama: Hyomen Gizyutsusya no tameno Denkikagaku (Electrochemistry for Surface Engineer), Maruzen, Tokyo, (2005), 178 (in Japanese).